

ムンバイの ダツバー ワラーさん

5000人の弁当配達人

文写真＝阿部了 text & photographs : Satoru Abe coordination : Akio Sugimoto



午前11時過ぎ、ヴィルバルレ駅のホームにてヴィシュヌ・ケサル・ドクレーさんを撮る。この道50年、65歳のベテランだ。「35年前に同じ村出身の奥さんと結婚してから毎日弁当を作ってもらっているよ。昔は板でできている弁当箱もあったよ」。



ムンバイには
ダッバーワラーという職業があるという。
ダッバー（弁当箱）＋ワラー（配る人）、
つまり弁当配達人。
各家庭から弁当を集荷して、
仕事場まで届ける仕事である。
広いインドでムンバイにしか存在せず、
しかも1890年から125年にもわたり続く
職業だという。
これを知って興味を引かれた
“おべんとうハンター”のカメラマンが
弁当配達人を追って、
ムンバイへの旅に出た。

ヴィルバルレ駅前に白の帽子がトレードマークのダッバーワラーたちが集まって来た。自分たちが食べる弁当も忘れずに背負っている。



ムンバイのダッバーワラーの数は約5000人。
毎日およそ20万個の弁当箱を
自転車で各家庭から回収し、電車で載せ、
仕事場のある駅で降ろし、
自転車や大八車を使って各人に配達している。
配達ミスはほとんどない。
街を走る2本のローカル線が
早くから発達したことが
この職業を可能にした。
さまざまな人が働く大都市ムンバイでは、
食習慣も人によってさまざま。
それに対応させるため、
家のごはんを届けるサービスができたという。

弁当を載せる列車の荷物
用コンパートメントの中。弁
当は何百個あるだろうか。
南北に細長いムンバイは、
道路がいつも大渋滞。2本
のローカル線が、ムンバイ
の人たちのライフラインだ。

ムンバイのおべんとうの時間



観光タクシー運転手
シャシカント・カンダガレさん



コンサルタント会社経営
ブラディープ・シャーさん



弁護士
ダワニ・メハタさん



塗料店経営
ラメーシュ・ワスニさん



金店勤務
ヒテッシュ・シャーさん



サリー卸店
チャンドラカント・バレークさん
ヒマंシュ・バレークさん親子と
親戚のビジャール・ドシさん

弁当配達人を追って

ダッパワーラーさんの存在を知った時は驚いた。ムンバイには、「弁当配達人」なる人たちがいると聞いたのだ。誰から、いつ聞いたのかは忘れてしまったけれど、以来ずっと気になってたまらなかった。家で手作りしたお弁当を、家庭まで受け取りに行つて職場まで配達する人を、「ダッパワーラー」と呼ぶそうだ。集めた情報では、125年前くらいから続く仕事で、約5000人ものお弁当配達人たちが毎日およそ20万個のお弁当を時間どおりに届け、配達ミスはほとんどないとか。しかも、食べ終えた弁当を、また取りに行つて家まで返すというアフターケア付きというのも、凄いと思った。しかし、疑問も湧いてくる。そもそも、どうして自分で弁当を持って行かないんだろう。しかも、ダッパワーラーさんがあるのはムンバイだけ、というのはな



ダッパワーラー協会組合長のラグナート・D・メドゲさん。「私の父も祖父もダッパワーラーでした」。

ぜなんだろう。それを知りたくて、旅に出た。

キイ、キイ、キイ。聞いたことのない鳥の声で、目が覚めた。ムンバイに到着して最初の朝。起きると同時に腹も鳴る。ホテルの朝食は、僕の

大好きなゆで卵に豆のカレーを添えて、トーストとヨーグルト、チャイ。ターバンを巻いて赤いネクタイをした紳士が、僕を見ると「おはようございます」と声をかけてくれた。チャイを飲んでいた髭の紳士、聞けばこのホテルの持ち主で、昔東京に住んでいたという。彼の笑顔で、気持ちよく一日がスタートした。

今回の取材にあたっては、コーディネートターの杉本さんが事前に「ダッパワーラー組合」の組合長に話をしてくれていた。そういう組織があることも面白い。組合長は、班長だというアヒルさんという人を紹介してくれたのだが、しかし、それだけである。他は何も決まっていない中で、取材旅のスタートだ。どうなるのか。ハラハラしながら、車のクラクションで声も聞き取れないような街に出た。



お供え物の花売り。インドの正月デワリも近い。

バイク、そして人、人、人。香ばしい匂いのほうに何とか歩いていくと、ナンを揚げる人、チャイを淹れる人、バナナを売る人、新聞を売る人、そして髪を切る人までいて、もの凄い喧騒、賑やかさだった。すでに圧倒されてしまう。

班長のアヒルさんは、最初、無表情で何だか雲行きが怪しかった。大丈夫か。杉本さんに任せておくしかないわけだが、やりとりが終わると、アヒルさんは別人のような笑顔になっていた。よかった。交渉成立か。アヒルさんは、この道16年、班長になって5年だそうで、班の26人を束ねている。日によって弁当の数や集配する場所が変動するので、ダッパワーラーたちの振り分けなどで、日々忙しい。彼自身も、毎日奥さんが作った弁当を、仲間と一緒に食べるそうだ。さて、班長アヒルさんは、ダッパワー



20万個の弁当を積み上げたら月までいくか？暗号とともに。

く。僕らも、そのコンパートメントに乗せてもらうことになった。「ドア際は危ないから、奥の椅子に座りなさい」と言われ、移動した。見れば、薄暗い車内には、何百個というお弁当があった。それを囲むように、ダッパワーラーさんたちが座っている。時折、強い日差しが差し込んで、車内を照らし、またすぐ薄暗くなる。静かだった。まるで、映画の一場面を観ているような、不思議な時間だった。

マリンラインズ駅に到着。ここからは、ダッパワーラーのサントーシユさんに密着することになった。同じく、アヒル班のメンバーである。他の駅から乗ってきたダッパワーラーさんたちも一緒に、ここではチームを超えた共同作業に入る。駅で降ろされた弁当は、またそれぞれの配達先エリアごとに分けられ



荷物専用コンパートメントに乗り込むダッパワーラー。目的地まで一息つく。それぞれの時間。

頻繁にやってくる電車は、どれもあふれんほどの人で、ホームに着くと、どこーっと人の群れが押し寄せてくる。私を知る、山手線や埼京線の比ではない。電車にドアがあるのかさえ、わからない。人が多くて、それさえ見えない。これでは、電車に乗るのさえ命がけのように思えてくる。当然、お弁当を持って電車に乗るなんてことは無理である。なるほど、ムンバイでダッパワーラーさんが必要ない理由がわかる。

ダッパワーラーたちは車両の荷物用コンパートメントに次々乗り込んでい



電車にはあふれんほどの人、人、人。

ラーのバルさんを紹介してくれた。僕らは、お弁当の集荷に向かうバルさんに同行させてもらうことになった。「おお、ダッパワーラー」「おお、ダッパワーラー」と、バルさんは皆から声をかけられる。チャイ売りのおじさん、犬を連れて散歩している人、バイクに乗っている友達。皆が寄ってきては、ひと言、ふた言喋って笑顔で去っていく。「おーシャ ンゼリゼ」ならぬ「おーダッパワーラー」である。地域密着型のお弁当配達人が、皆から慕われているのを感じた。



たくさんのお弁当を載せた台。この後電車に、その後は大八車に載せる。



自転車で弁当を運ぶサントーシュさん。

お弁当は 優しい家庭の味



大八車でオフィス街へ配達。車道を通るので、交差点が難所だ。

ていく。サントーシュさんは、駅前に停めておいた自転車を使って配達する。ハインドル部分と後ろの荷台にバランスよく20個ほどを括りつけ、いざ、出発だ。

人、タクシー、バス、バイク、大八車をよけながら自転車を走らせる。交差点に差し掛かると、我れ先に、とばかりに人タクシー、バイク、大八車が入り乱れる。クラクションは鳴り止まない。叫び声。排気ガス。何のための信号やら。後をついて行くのに、こっちも必死だ。大通りから一本入ると、今度は、人、人、人であった。小さな商店が並ぶ問屋街のようであった。秋葉原のような電気街を抜けると、合羽橋みたいな食器街へ。サリーを売る店の先には、スパイス、工具を売る店。道端には、バナナ屋さん、パン屋さん、とにかく何でもある。サントーシュさんはこの混雑をものともせず、人の波をすいすい進む。

商店やビルで立ち止まると、弁当をひとつ、またひとつ、手渡していった。ピ

ルの3階に行つて、直接本人に手渡しすることもあれば、ドアを開けたところに置いていくこともある。

僕は、とにかくサントーシュさんを見失わないよう、トレッドマークの白い帽子を目印に、人の波を泳ぐように行つて行つた。まるで、ボクサーにでもなった気分だった。体を右に左に、前に後ろに、人混みの中、カメラを構えつつ、前へ進む。汗だくだ。絶えず水を飲みながら、顔を真っ赤にしながら、前に後ろに。右左。屋台のサトウキビジュースが目に入り、がぶつと飲みたくなる。海があれば飛び込みたい。

そろそろ終盤になり、手持ちの弁当は2個になった。「サントーシュさんのお昼はどうするんですか?」「いつもの場所、仲間と弁当を食べるんですよ」。

サントーシュさんの「いつもの場所」が気になった。何しろ、どこへ行っても人混みだった。サントーシュさんが到着した時には、すでに4人がもう食べ

んたち、子どもたち、総勢12人。お母さんと奥さんたちが、交代で弁当を作る。「見に来ていいよ」と言ってもらった時には、うれしかった。

朝9時。台所では、アビシエークさんの二人のお兄さんの奥さんたちが台所に立っていた。どうやら、アビシエークさんの奥さんは、その日の当番ではないようだ。長男の奥さんが、キッチンにペタツと座り、夕顔の実を切っていた。まな板の上でなく、手を使って器用に切る。チャパティ用の生地も、座ったまま練る。次男の奥さんは、野菜を煮込み、チャパティを専用のフライパンで焼く。私があまりにじつと見るものだから、二人とも照れ臭そうに、見つめ合つて微笑んでいた。今日の弁当は、夕顔の実を炒めたカレーとダー



皆、右手を使って器用に食べる。

ル（豆のカレー）、チャパティ、ご飯である。これを4段の弁当箱に詰める。

「弁当箱を開けた時、今日は誰が作ったのがわかるのも楽しみなんだ」と、まだ家にいて、私たちを迎えてくれたアビシエークさんが言う。「お弁当は、ライフライン、生命線なんだ。父と兄と毎日食べるけど、時間どおりに食べないと力が出ない。食べることは、とっても大切な時間だからね」。

「味見をして」と、出来立てのカレーを振る舞ってくれた。チャパティをちぎり、夕顔の実のカレーを包むようにして口に入れると、アビシエークさんが「こういうふうには、右手だけでチャパティをちぎってカレーをつまんでみて」と、やって見せてくれた。

そうか、ここはインド。早速試してみるのが、なかなか難しい。片手では、うまくちぎれない。「私だって箸を使うのは容易ではありませんから」。優しい言葉をかけてくれるアビシエークさん。何度

かやるうち、うまくいった。そして、気づいた。指もうまい。中指、親指、人差し指と舐める。いや、指がうまいんじゃない。指についたカレーが旨い。おにぎりを食べながら、指についたご飯粒を食べる、あの感じだ。アビシエークさんと目を合わせながら、「マゼーダール」と頷き合った。

旅の中で、たくさんのお弁当に出会った。その時、スプーンもフォークもないことに、あらためて驚いたのだった。皆、右手で食べていた。ああ、今更になつて思う。もっと右手を使って、食べればよかった。

人でごった返す問屋街。インドの西にあるムンバイ、目の前はアラビア海。光がエキゾチックだ。



道端でオクラのカレー、豆のカレー、じゃがいものカレーなどを囲むダッバーワラーさんたち。





アビシェーク・パリーさんと
スニール・パリーさん
藤家具の販売店経営

初日に出会ったアビシェークさん(左)と兄のスニールさん。兄弟仲が良い。そして二人ともよく喋る。スニールさんは、赤い豆のカレーや茄子のカレーが好き。アビシェークさんはオクラのカレーやタロの実のカレーが好き。



弁当配達に駅から出発するサントーシュさん。これだけ積んでいると自転車に乗れないようだ。



チャパティの生地を作る長男の奥さん、アニタさん。チャパティは、毎食生地をこねて焼いている。

「おべんとうとは、生命線です。
家のごはんは、僕を支えるライフライン。
家の人のためにも残さず食べます」



アビシェークさん家族の集合写真。左端はたまたま遊びに来ていた親戚の女性。後列、黒いスカーフの女性はアビシェークさんの奥さんのパンダナさん、その右はスニールさんの奥さんのチャンダーさん。



出来上がり。家族も昼に同じメニューを食べる。



チャパティを焼く。



夕顔の実をスパイスと炒める。



子どもたちは朝食中。



火の準備をする。



チャパティの生地をこねて麺棒で薄くのばす。



おべんとうの準備。炒め物にする夕顔の実を切る。

START
9:00~

10:30~



弁当箱をダッパワーラーのバルさんが取りに来る。



上の子ども二人は学校へ。



おべんとうが各所から駅前に集められる。



電車で仕事場の最寄り駅まで移動。

12:30ごろ



おべんとうが仕事場に到着。

13:30~



おべんとうの時間。



完食!

いざというときまでした!

ダッバーワラーさんのおべんとうの時間



ダッバーワラー
サントーシュ・ムケーさん



ダッバーワラー・班長
アヒル・マハードウ・アーガオさん



バンドラ駅でいつもの仲間たちと弁当を食べるヴィシュヌさん。この後、食べ終わった弁当を各仕事場に取りに行き回り、各家に戻りて帰宅するのは19時頃になるという。



ムンバイへの翼

ムンバイへは、東京(成田)からANA直行便でチャトラパティ・シヴァージー国際空港へ。



チャパティをちぎりカレーをつまむ。見ていると、ご飯は“締め”に、残ったカレーと共に食べるようだ。

拝啓、ダッバーワラーさんへ

いただいたあのトレードマークの帽子、帰国してすぐに家族の前でかぶってみせました。似合ってる、似合ってる、インドの人みたいと言われました。僕も調子によって白シャツと白ズボンをタンスから探してきて、気分はダッバーワラーさんでした。

皆さんと電車に乗っている時に『翼の王国』を渡しましたが、雑誌の世界地図をジッと見るダッバーワラーさんたちの真剣な眼差しが忘れられません。何度も日本地図と世界地図のページをめくってはアゴのヒゲを触っていました。いつか日本でダッバーワラーをやる時があれば、撮影現場まで弁当の配達をお願いします。僕も皆さんとお揃いのステンレス製の5段の弁当箱をヴィルパルレ駅の近くで買いました。また何年か後にムンバイに行き、皆さんが変わりなく仕事をしているところを見たいです。ぜひお会いしましょう。

2015年12月

敬具
阿部 了